書 評 BOOK REVIEW

屋根の花園～芝棟・草屋根を日本と世界に訪ねて～

山口隆子 著，142 頁，定価 2,400 円
発行：八坂書房 ISBN 978-4-89694-377-1

山口隆子氏が 30 年間にわたって興味を持ってきた，芝棟（しばむね）の成著がこのほど出版された。芝棟については初めて耳にする読者もいるかもしれない。茅葺屋根の棟をシバの生えた土の重みで押さえると同時に，シバの根が棟にからみつくことで棟を固定するものである。水戸黄門やマリー・アントワネットが芝棟を愛していたことを皮切りに，日本の芝棟，フランスの芝棟，フェロー諸島の草屋根が，美しい写真と共に現地に即して紹介されている。

著者の山口隆子氏は生気象学を収めた後，東京都庁の造園職として勤務し，屋上緑化や都市公園行政に携わり，現在は法政大学の地理学科で教鞭を執っている。芝棟との出会いはおかあさまが屋上緑化や壁面緑化について学んでいる著者へのおみやげとして，芝棟の絵はがきを購入してくれたことに始まり，約 30 年間にわたり興味を持ち続けてきた。

芝棟の研究には亘理俊次（1991）「芝棟～屋根の花園を訪ねて～」があり，「亘理芝棟コレクション」が東京大学総合研究博物館のサイトにあることが紹介されている。評者が 4 年生のときの教室のセミナーで亘理先生が芝棟について講演してくださったのだが，我々分子生物学時代の学生はどんな生物学的な意味があるのだろうかとささやきあった記憶がある。亘理先生が生物学者であったのとは異なり，山口氏は地理学者，生気象学者であるので，芝棟に対する見方も異なっている。雨温図によって環境が比較されているので，東京はパリに比べて，なんと雨量が多く，気温が高いのだろうと驚かされた。

著者が初めて芝棟調査を行った川崎市立日本民家園は明治大学生田キャンパスから近いので，20 年ほど前に学生実習で芝棟の観察をしたことがある。確かに芝棟の植物が見えるのだが，学生にとっては，囲炉裏に火を入れてもてなしてくれるボランティアの活動と比べて，興味が湧かなかいようだった。この本があれば，ヨーロッパにまで興味が広がったと思うと残念でならない。山口氏には生物多様性緑化研究部会の zoom 連続講演会で講演していただいた。日本民家園の学芸員や民家園の位置する生田緑地の関係者がおおぜい聞く機会を得た。日本民家園や生田緑地で芝棟に対する評価が一層高まることが期待される。

講演の中で，私の住んでいる小さな町国立市の民家の修復に当たって，芝棟が取りいれられることを知った（写真-1）。「2020 年，旧本田家住宅は東京都指定有形文化財(建造物)に指定された。国立市が所有する文化財としては，初の東京都の指定文化財である。・・・2023 から 2025 年度 復原工事(予定）」。工事の完了は，2026 年以降になるそうだが，9 月下旬から 11 月にかけて「写真にみる本田家」（郷土文化館）が開催される。

写真-1 旧本田家住宅

「第 5 章 屋根の花園のこれから」で，著者は，芝棟や草屋根をみたことがなくても屋上緑化は目にしたことがあるのではないか。屋上緑化は，都市において貴重な緑地であり，さまざまな動物の生息地となっているとともに，ヒートアイランド対策や地球温暖化対策にも貢献しており，日本の都市緑化技術は世界に誇るものである，と結んでいる。

現地に足を運ぶことが勧められており，見学可能な日本の芝棟が写真やメッセージとともに紹介されている。早速，身近な芝棟を訪れてみたい。

倉本 宣（明治大学 農学部）